阪神淡路大震災における市民の体験

Experiences of General Public in the 1995 Southern Hyogo Prefecture Earthquake

山田　常圭*
Tokiyoshi Yamada

1. はじめに

阪神淡路大震災より5年近く経過した。この間，震災地での復興が進むにつれ，大地震の爪痕が街角から姿を消し，それと共に筆舌に尽くしがたいはずの記憶も徐々に風化してきたように思われる。「災害は忘れた頃にやってくる」とは，関東大震災後の有名な警句であるが，今年になってから，立て続けにトルコ・台湾で地震が発生した。多くの国民にとっては対岸の火事であったかもしれないが，神戸の震災直後の辛酸な記憶を思い起こすのに役立つことを願っている。

さて，1997年4月から9回にわたり，本学会の兵庫県南部地震災害調査委員会・市民行動調査WGが実施したアンケート調査内容の連載記事[1)~9)]に本誌紙面を割いて頂いた。

これらの内容は，1996年に刊行された「1995年兵庫県南部地震における火災に関する報告書」[10)]にもまとめられているが，その後の分析で得られた結果の紹介も含まれている。そもそも，本連載を始めたきっかけは，初回[1)]でも述べているように，被災地の人々に行った調査報告会（1979年実施）に端を発している。市民行動ワーキンググループの一同は，被災地の市民の行動について詳細な分析ができ，それなりに被害の状況について平均像を浮き彫りにできたのではないかと自負していた。この点についての思いは，今も変わっていないが，それに反して報告会で市民から得られた反応はあまり芳しくなく，特に，平均像が被災地の市民が体験した実感とはほど遠いのではと，何人かの聴衆者から指摘を受けた。市民の地震に対する行動や，受け止め方は，確かに個々の住人の生活様式にたぶんに依るところがあるから，平均化することに限界があるかもしれないし，またもう少し地域性に基づいたミクロ的分析が必要であったのでは，と反省させられた。こうした点について，多少の追加分析を加えると共に，すでに得られた調査結果についても，火災の専門家集団である火災の読者の方々に目にしていただき，忌憚のない意見をいただきたいとの趣旨で始めたのが一連の連載記事である。

9回の連載を通じて概ね調査内容を一巡り説明できたと考えており，本報では全体のまとめにかえ，調査側の視点ではなく，多くのご指摘を頂いた市民側にとって地震がいかなるものであったか，回答者の生の声を掲載することをもって，最終回とさせていただきたい。

2. 自由記述内容

アンケート調査の多くの項目は，選択肢の中から択一式での回答を得たが，一部自由に記述してもらう回答欄も設問として用意した。そして4,000通近くの回収アンケート中，この自由記述欄に，1300余の回答を頂いた。すべてを記すことは紙面の都合からも，プライバシーの関係からできないが，ここでは，その中から公開の承諾の得られた方々の主な回答から，プライバシーに関わる部分等を削除し掲載した

なお，掲載内容は，比較的，頻度の高い回答内容から選んだが，それでも全体の一部であるため，以下の抜粋内容が，自由回答全体の一般的な傾向を表しているとは限らないことを最初にお断りしたい。

以下，自由記述内容を，1.地震後の状況に関するもの，2.行政機関等への要望・意見に関するものと大きく分類し，できるだけ原文に忠実に，回答者の被災地域も併せて掲載した。またさらに，

*自治省消防庁消防研究所

全体のアンケート中，今後役立つと思われる火災に対しての教訓については，内容を抜粋し箇条書きでまとめなおした形で掲載した。

2.1 地震後の状況に関する自由記述

『地震で家が焼けてしまったのは，当日の夜でした。当日朝方，小学校に避難しましたが，次々と避難してくる人達を見て，しばらくこの学校にいるしかないのだなあと思い昼過ぎに何か出せる物はないかと家に戻りましたが，出せた物はこたつ布団一枚きりでした。家の中は，ガラスが割れて，散乱しており，ケガをしては馬鹿らしいと思って，その日は中止しましたが，まさかその日に焼けてしまうとは…。火災の恐怖はなかったのですが，あっけに取られて，夢か何かに踊らされているのか，茫然と立ちつくしていました。こんな経験は二度としたくありません。命があるだけでもと感謝しなければなりませんが，私が生まれ育った家でした。自分の半生をもぎ取られた気持ちで，本当に淋しい限りです。』[水笠西公園地区]

『(…略…) 松野通６丁目の焼失は15:00頃と思うが，消防車が来て10分位放水して水がないので引き上げたその時（風向等の判断であろうが消防士は類焼しないといった。）水笠６丁目から進んできた火は水笠公園でさえぎられ直接大地町１丁目にとどかなかったが倒れなかった家が続いてゐる北へ転じクリーニング店の火災などは幾度も火柱が上り火勢を強めた。倒壊していなかった水笠コーヒー店の高く上った火柱が，大地町１丁目北東南の倒壊して道巾一ぱいになった木材の上に火の粉を降りそそいで引火した。この時間帯，消防車，消防士の姿は１度も見なかった。消防士等の指揮命令系統はどうなっておったか？　風速もそんなに強くなかったし，江戸時代の(い)(ろ)纏持であれは鳶口廃材を除き類焼を防げたかも知れない。そして水が出なかった事に対する神戸市の行政責任はどうなるのであろうか。』

[水笠西公園地区]

『(…略…) この調査でひとつ感じたことは，設問で（難しいと思いますが）該当する回答を探すのに苦労をした点です。千差万別の状況ですので「その他」のスペースを大きくして，具体的に回答して貰った方が，現実を正確に把握できるのではないかと考えます。私のように被災のど真ん中にあるものは，周囲を客観的に見ることが困難な状態でした。私の町でも救出して病院へ運んだ人，遺体で掘り出した人の他に，生死不明のまま焼けて，翌朝改めて遺骨を探した人等，種々様々でした。ＪＲの高架の南側（長田区，鷹取市場等）は朝から燃えておりました。火の廻りが早くて救出が間に合わず，生きながら焼かれた大人もおられます。幸か不幸か，常盤町は夕方から火が入りましたので暗くなっても，火が近づいて消防から避難をせかされるまでは救出作業が続けられました。子供や孫達の安否を尋ねて自宅を離れ，帰ってきたときは家が焼けており近づけなかった人もあります。まさに千差万別で簡単には書けないのです。』

[千歳小公園地区]

『地震発生後すぐに近くで火災が発生し，２階の窓から火が見え，煙が充満していました。１階の母が気になり階段を下りようとしましたが，真っ暗で階段が無くなり，いつまでいっても平衡で。火がどの辺まで燃えているのか分からず，とにかく外へ出なければと思い，母のことが気になりつつ，２階の窓から飛び降りました。あの時火事さえ起こっていなければ，もう少し冷静に行動が取れてたと思うととても悔しいです。』

[御船通地区]

『地震では家は無事だったので，屋外に出るまでは大災害であることに気づかなかった。特に屋外で火の粉が降っているのを見てはじめて火災が発生していることを知った。とても静かだったのが印象的だった。(消防車の音がなかったので) 風向きがかわり安心した時に，１人住まいの婦人のことを思い出して訪ねようとした時，東から行って倒壊家屋に道をふさがれて，西から回って訪ねることが出来たが，その時倒壊家屋から煙が出ているのに気づく。10数個の消火器と井戸水で初期消火に努めたが，消防車も水もなく，無駄と思ったが義務として消火活動を放棄することが出来ず井戸水がくめなくなるまでする。あとは窓越し

に火勢を見ながらふとんと衣類を出す。アンケートではよく時間をきかれるが，あの状況で時間など見ているわけはなく，(以下略)』

[会下山南地区]

『1月17日午前5時46分の地震の時には古い家でしたが壁が一部落ちただけで後始末しておりましたが，上沢通に火が出ているとのことでしたが，火元くらいは消防の方で消してくれることと思っておりましたら，午後3時頃火が廻って来て全焼してしまいました。隣の家に火がついてても我が家が焼けると思えず，自分の情けないことを悔やんでおります。(…略…)』 [会下山南地区]

『1階は店舗，2階3階で生活していました。震災後1階へ下がりましたが店に行く戸が開かず，生活の玄関口の戸も開かず2階の窓（アルミサッシ）を最初にゆれたとき開けていたので，そこからしか出るところがなく，その窓から飛び降りた，下から息子に受けてもらいました。火元がどこからか，どうして，いつ，出たのか，私の家の類焼がいつどの様にしてなったのか，できるなら知りたいものです。 [神戸デパート地区]

『神戸は海洋性で冬でも内陸（大陸性でなく）よい温暖で，夏も朝夕で寒暖の差少なく住み易いところと自認。雪も近年少なく雨もまず適量，住みよい所と確信していた処，H7年1月17日5時17分突如の上下，水平動と2F建事務所兼住宅は1Fにて倒壊家具天井屋根瓦礫の下敷きになり，身動きすら出来ぬまま7時……。(…略…) 諦めましたが，火の子の飛び火で一念発起。腰がどうかなってると感じ，このまま焼死して紙面にのるより奮起してと痛みを我慢して這い出すのに更に1時間余りかかったとき，ブルブル震えていたのに汗が吹きでるまでなり，九死に一生を得て何とか這い出られたものの，肌着1枚では又ブルブルガタガタふるえ，歯がガチガチ鳴り，四方の壁やタイル並板を乗り越え外に出るのにひと苦労もふた苦労もしました。火事場の馬鹿力で外壁を飛び越え助かりました。取急ぎ同封のアンケート記入を急いでと思い災害時の後遺症で手，脊椎，腰の痛み，手のフルエで読みにくいと存じますが，(以下判読できず略)』 [新長田駅地区]

『(…略…) あの時私1人だったらたぶん死んでいただろうと思います。グラッグラッとして気が付いた時には，もう箪笥や壁は倒れその下敷となり生き埋めになっていました。何度も大声で助けを求めましたが，誰も来てくれませんでした。震災後約1時間程経ったころ，近くで火災が発生したらしく，男性の方が2，3人助けに来てくれましたので，やっと助け出されました。大事なものを持ち出したいとあたりを見まわしましたが，どこに何があるのか暗闇でわからず兎も角パジャマ，裸足のまま避難所へ行きました。その後幾度も大事な物や布団とか毛布を取りに帰りたいと思いましたが余震の恐怖と火災で，取りに帰ることが出来ず，全てを消失してしまいました。10ヶ月余を経た今日も，なお，当時のことが頭から離れず，精神的にも苦しい毎日を送っています。あの時消防署がすばやい消火活動をしてくれていたらと無念でなりません。(以下略)』

[太田中南地区]

『①震災時横にある大きな立看板の下敷きなっていれば死はまちがいない。ガソリンスタンドの立かんばん） ②もう少し，ゆれが三分ないし四分位いおそければ。国道二号線での末泥の交差点での（…判読不明…）北側での（東行）セメントべいで下じきになり其の時も死はまちがいないと後で思えば身ぶるいした。③大変でしょうが本調査，がんばって下さい。』 [神前住宅地区]

『家の裏（北側6m，西側30m）が空き地，東側がビルだったので飛び火があったが助かった。家を平成4年に新築（防炎加工の建材，耐熱ガラスの窓）したので助かった。川向かいの中学校（大田中学）のプールのブロック塀が崩壊していたため，簡単にホースを引っ張れた（近くの消火栓，防火水槽は使用できず）ので延焼を免れた。携帯電話，公衆電話が使用できない（通じない）ため，消防車が近くにあるにも関わらず消防車の到着が遅れ，燃え広がった。さまざまなところで，出火したが，出火原因が何だったか，また今後個々人が火災防止のため，どんな対策をとったら

よいのかとおり一遍のことではなく，もっと詳しく知りたい。(…以下略)』　[太田中北地区]

『全壊全焼，5，6軒先から出火しました。消防車も来ないし，ガスと電気が中和すると人体に悪影響が来るから水をかけてはいけないと近所の方々が言うので（私にはこの難しいことは分かりませんが）水を出す事は出来たと思いますが。家，倒壊直後，主人の名を100回ほど呼びましたが返事無くて圧死状態でした。枕を共にして休んでいたのですが，私は頭顔の周り30センチほどの空間があって，孫（高2男子）に助け出されました。悲惨です。家がまだ建ちませんし，1周忌も来ますのに，日毎涙で暮らしています。(…略)』

[住吉本2地区]

2.2　行政機関等への意見・要望

『長田区が1日中燃え続け，道にホースが何本も並べてあったが，断水で水が出ず，放置され延々と広がった。空からの消火も一切なく，日が暮れてから須磨区にも火の粉が舞い落ち，あっという間に一面，町全体焼け落ちた。地震後13時間後に燃えたのに火災保険金が支払われないのは憤りを感じている。ヘリコプターからの消火活動をしてほしかった。翌日，他県から消防車が焼け跡に水をかけていたが遅すぎた。首都東京都の連絡がつかなかった政府間の情報網を最も改めるべきだと思う。』　[千歳小公園地区]

『水の出ない消火栓ほど悲惨なものがなく，道路の拡張や建造物もさることながら，震度7，8ほどに耐える水道設備があればと思います。』

[会下山南地区]

『防災に対する知識（特に消火活動）が欠如していた。消火は消防局にばかり任せず，集団で消火活動が必要である事を痛切に感じた。(住民全員)』　[会下山南地区]

『(…略…) ライフラインの復旧について』

イ．ガスが4月6日に復旧し，一番遅れた。水道給水のようなガスの配給制度があればと思った。

ロ．関西電力は平常時，保安協会なるものが年1度位各家庭を廻り絶縁を調査しているが，地震後の通電に際しては，引き込みまでの責任を持ちます，屋内は個人で責任を持てとのことだった。災難の時にこそ安全を期すべきと思う。公共事業としての姿勢に疑問あり。これに反し，復旧は遅れたものの，大阪ガスは丁寧に調査の上，開栓してくれた。

ハ．ライフライン復旧の情報はテレビに頼ったが，きわめて曖昧で役に立たなかった。電話しても通じない状態では，もう少し親切な情報が欲しかった。』　[会下山南地区]

『阪神大震災で火災を防ごうと思っても道路がだめですから，消防車もこれません。電柱も曲がり無理です。あの火災は防ぐことは出来ませんが，もう少し遅れていればもう一人の救出ができます。残念です。30軒で10人方が亡くなられています。この震災で色々な経験もしました。人の大切さ，温かさ，若い方，ボランティアの方に温かいお心を頂きました。避難所では27日間お世話になり，保育所の先生方が寒いときなどで炊き出しもしていただき，カゼをひかないようにと気をつけて下さり，感謝でいっぱいです。思いだせば涙がでます。私も弟が圧死で，火災でお骨になっていました。』　[菅原御蔵地区]

2.3.　その他の教訓等

自由記述の中には今回の地震体験に基づく教訓，身近な被害軽減対策，心構えについて多くの貴重な意見が寄せられた。以下主だった記述内容を整理し箇条書きにした。

(1)　地域内での協力の必要性

・お年寄りの一人暮らしの人は，戸が開かず出られないとか恐ろしくて出られないため，家族への連絡・周囲の人の協力が必要。

・防災訓練は，何もない中で（消防車や水など）どのようにして火を消すか，人を助けるか，医療を行うか，そんな臨機応変な対応が重要。限られた人だけでなく，皆ができるような地域の訓練，結びつきが必要。

・大震災時の火災や倒壊に対して，消防署や警察の救援は手不足になるので，近隣の相互の助け合いがもっとも大切。たとえ，近隣の

人々とのおつきあいがなくても，知らない人同士で助け合える。

(2) 正確な情報・連絡網の確保

・電話の不通，正確な情報不足（救援は来るのかこないのか，被害はどのあたりまで及んでいるのか）のため孤立感を味わった。

・震災直後一番ありがたかったのはのは，近所の人と話ができたこと，どなたかがラジオを外に持ってきてくださっていてニュースが聞けたこと。

・避難命令が出たため，殆ど住民が避難所に逃げ込んで延焼状況を知らなかった。避難所への連絡不十分の原因であり，どこに逃げたのか玄関先で明記しておけば連絡することができ，家財の持ち出しができたのではないか。

(3) 消火用水，生活用水の確保

・水が出なくて消火活動ができず，被害が甚大になり残念。水の確保・対応（道路，公園地下の防火水槽の確保，風呂の水はり）がもっとも重要。

・防火水槽からの汲み上げで，ロープとブリキ製のバケツがあったことが，本当によかった。ポリバケツは運搬できるが，汲み上げるのはブリキ製の比ではなかった。

(4) 家の中での防災対策

・家の中はガラス等の散乱で歩行できなくなるため，スリッパか靴下でもはくこと。

・ガラスの破片がいっぱいで，靴下を皆に着用，手に触れる靴を何でもいいからはかせて外にでた。

・裸足で飛び出したが，近所の人が靴とか靴下を貸してくれて大変助かった。

・家の中は足の踏み場もないほど物が倒れていたが，出入り口等には倒壊するものをおいていなかったので，スムーズに外へでることができた。

・就寝場所には家具をおいてなかったので下敷きにならなかった。

・懐中電灯を持ってねておりましたが，とても役だった。それが暗闇の中で手探りの手にあたったため，そのお陰で・主人，子供とをうまく助け出すことができた。

(5) 地震後の防火対策

・近所のガスの元栓を締めて歩いた。また，通行人が大勢，不用意にたばこに火をつけるので，ガスが漏れているので，たばこを吸わないようにかなり大勢の人達に注意した。

・ガスの元栓は近所の家のまでしめて歩いたが，電気のブレーカーには気づかなかった。

・通電があった後，倒れている冷蔵庫のモータが動いていたし，オーブンのタイマーが自動的にまわって通電し赤くなっていたので，ブレーカをおろした。台所にいくことがなければ，出火していたと思う。

・地震後，電化製品は，すべてコンセントを抜き，安全器をきって避難する余裕はあった。

(6) 火災の延焼拡大防止

・火災発生の時は窓などを閉めて，火の粉等で燃えないよう，干し物を取り込むようにした。近隣のマンションでは，まず，洗濯物が燃えてベランダに落ち，下のポリ缶に火がついた。ベランダの戸が開いていたので，室内の火災につながった。人がいれば火災にはならなかったと思う。

・家に火が迫った時飛んでくる火の粉を，バケツにお風呂の水を入れ，箒でたたき消し延焼を防いだ。ソーラーシステムの水が役に立った。

(7) 路上駐車の自動車への対応

・ガレージ内の車が，地震時に道路の中央まで飛び出していて，前の家が燃えた影響で，車の前面が溶けた。車をガレージに戻したが，ガソリンに引火すれば，隣接地区への延焼となった。

・隣がモータプールであったため，自動車２台くらいが熱で爆発したが，それ以外燃えるものがなかったのが幸いした。

・路上駐車している車のガソリンタンクが炎上し，火勢を強め火を拡散していた。

(8) 避難時の電線対策

・避難する時に電柱が倒れトランスが落ち，電線が垂れ下がり暗闇の中で電線がまったく見えず恐ろしかった。感電する怖さが避難を遅くした。

(9) 都市計画に関する教訓

・路地の恐ろしさをしっかりと見た。道幅は十分とるべきだと思う。

・細い路地が多く，倒壊した家で道がふさがれてでる道がなかった。最低，車が通るくらいの道幅は必要だとおもった。

・道幅が狭いので，火災をくい止めることができなかった。区画整理の必要性を痛感した。

・耐火建築の家も周りの家が火事となり周辺を火に包まれると持たない。隣近協力して耐火構造とせねば無意味である。

3. まとめ

火災学会，市民行動WGのアンケート調査では，市民のあるレベルでの平均像を描くことができたと考えている。また，調査を通じて今後の防災安全対策について利用できる知見も整理し，一連の既報の中ですでに紹介してきたつもりである。しかしながら，内容を検討し直すと，そうした内容は，自由回答の中でも市民から多々指摘されている事項であったり，また調査を待たずとも明らかで，それを今回の調査で改めて確認したというようなものも少なくない。

また，冒頭にものべたように，一般化された客観的結果は，災害を体験した人たちからみれば，あまりにも実感からかけ離れているようであり，もう少しミクロな視点から，地域性・住民側の視点にたった調査・分析の方法があったのではないかとWGの間で議論がなされてきた。今回掲載したような市民の生の声も，従来の平均操作の過程で埋もれてしまう心理面でのギャップを埋めるのに役立つのかもしれないと考えられる。現在，市民行動WGは，火災学会地震専門部会として発展的に体制を整備し，より地域に根ざしたミクロな視点での問題点の分析について新たな研究の方向を模索中である。近い将来，こうした内容について，報告ができればと願っている。

参考文献

1）北後明彦：連載　阪神淡路大震災時の火災と市民行動（その1）消失した地域における家屋被害,火災（227号）,Vol.47　No.2，pp.47-52,1997年4月

2）北後明彦：連載　阪神淡路大震災時の火災と市民行動（その2）消失した地域における人的被害,火災（228号）,Vol.47　No.3，pp.47-52,1997年1月

3）岩見達也：連載　阪神淡路大震災時の火災と市民行動（その3）地震時の出火状況，火災（230号）,Vol.47　No.5,pp.45-50,1997年10月

4）志田弘司：連載　阪神淡路大震災時の火災と市民行動（その4）大規模焼失地域における延焼状況，火災（231号）,Vol.47　No.6,pp.51-59,1997年12月

5）鈴木恵子：連載　阪神淡路大震災時の火災と市民行動（その5）地震発生時の火気の使用状況と火気対応行動，火災（232号）,Vol.48　No.1,pp.45-50,1998年2月

6）鈴木恵子：連載　阪神淡路大震災時の火災と市民行動（その6）市街地火災への対応行動，火災（235号）,Vol.48　No.4,pp.56-60,1998年8月

7）村田明子：連載　阪神淡路大震災時の火災と市民行動（その7）消火・延焼防止活動，火災（236号）,Vol.48　No.5,pp.40-45,1998年10月

8）村田明子：連載　阪神淡路大震災時の火災と市民行動（その8）広域避難，火災（237号),Vol.48 No.6,pp.45-48,1998年12月

9）池畠由華：連載　阪神淡路大震災時の火災と市民行動（その9）家屋内状況と家屋外へ出るまでの行動，火災（240号）,Vol.49　No.3,pp.40-45,1999年6月

10）日本火災学会：1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書,1996年11月,（日本火災学会で実費頒布中，5,000円）